

初年次教育・基礎教育についての一考察

神戸芸術工科大学における英語教育を中心に

A THOUGHT ON FIRST YEAR / FUNDAMENTAL EDUCATION From the Viewpoint of English Education at Kobe Design University

岡村 光浩

デザイン教育研究センター 准教授

Mitsuhiro OKAMURA

Center for Design Studies, Associate Professor

要旨

昨年度掲載論文の流れを受け、本稿では神戸芸術工科大学における英語教育の現況につき報告すると共に、本学の基礎教育・初年次教育全体における英語（外国語）教育の位置づけについて、論を続けていく。

まず前号論文以後に展開された2010年度の英語科カリキュラム改訂のねらいと現状について、大学院の状況も合わせて述べる。

次に、学生への指導方針の手がかりとして、「ニホン英語」の考え方について、その概要と授業での実践例を紹介する。最後に、英語の授業の一環として行った企画や指導した学生の活躍などを採り上げると共に、「英語（語学）以前の問題」への全学としての取り組みの必要性につき論じたい。

Summary

This paper is the sequel to the one published last year. The purpose of the paper is to explain the present situation of English education at Kobe Design University, and to continue its discussion on the positioning of English or foreign language education.

The author explains the aims and present situation of English curriculum reform, with current state of the graduate program. Then he introduces the idea of *Nihon Eigo* (Japanese English) as the possible key to the guiding principle for students. Finally, the author introduces some of his attempts in the class and the success of students he supervised, and discusses about the necessity for the university as a whole to tackle the problem “beyond” English/language education.

はじめに

神戸芸術工科大学も1989年の開学から20年を経て、2006年度に設置された先端芸術学部が完成年度を経て学科改組を迎えた2010年、本学における英語教育も、プレイスメント・テストによるクラス編成の導入、カリキュラムの改訂など、新たな時代を迎えた。

昨年度紀要掲載の拙稿（以下「前号論文」、URLは文末参照）においては、まず「芸工大で英語（語学）を学ぶ意味」について筆者の見解を述べた上で、本学開学以来の英語科開講科目の変遷について概観し、試行実施された「自己診断テスト」の結果や学生・教員からのアンケート・ヒアリング等の結果を参考に、本学英語教育の現状と今後のあり方について考察すると共に、筆者の感じる「英語（語学）以前の問題」についても、事例を交えて論じた。

本稿ではこの流れを受け、神戸芸術工科大学における英語教育の現況につき報告すると共に、今後のあるべき姿について考える試みを続けていく。

本学の基礎教育・教養教育・初年次教育全体における英語（外国語）教育の位置づけについて、「英語（語学）以前の問題」への取り組みも視野に入れつつ、論を続けていきたい。

まず前号論文以後に展開された2010年度の英語科カリキュラム改訂のねらいと現状について報告すると共に、更なる今後の課題を検討する（1章）。前号論文以降、2010年度より筆者が大学院での英語教育に参加するようになったため、これについても合わせて述べる（2章）。

次に、上記とも関連して、学生への指導方針として筆者も大いに参考としている、本学「総合英語」非常勤講師でもある末延岑生名誉教授（兵庫県立大学）の「ニホン英語」の考え方について、その概要と授業での実践例を紹介する（3章）。

最後に、前号論文5章でも述べた「英語以前の問題」への取り組みとして、英語の授業の一環として行った企画「ボクにも読めたNew York Times」と、授業の外で筆者が昨年度に続き参加したSIFE Japan国内大会2010における学生の活躍などを採り上げると共に、英語科の枠

を越えた全学としての取り組みの必要性につき論じたい（4章）。

なお、本稿における論考は、本学教職員・学生、英語科非常勤講師並びに関連学会会員各位その他のみなさまとの折々の議論を踏まえてはいるが、あくまで筆者の私見であり、神戸芸術工科大学またはデザイン教育研究センターの公式見解ではない。また投稿締め切り期日の関係上、事実関係の記述並びにそれに基づく考察は2010年7月末現在のものである旨、あらかじめお断り申し上げる。

1 2010年度の（学部）英語科カリキュラム改訂

前号論文（2～3章）に続き、本章ではまず、2010年度に実施された英語科カリキュラム改訂について、前号論文以後の展開を、そのねらいも含めて報告する。

なお本章ではカリキュラムの改訂に伴う「枠組み」の変更についてのみ説明し、授業内容のソフト面での工夫などについては3章以降で述べたい。

1-1 改訂の概要とそのねらい

1-1-1 プレイスメント・テストの本格導入

英語プレイスメント・テストの導入や、その結果の検証についての先行研究としては、初期には海外で作成された例¹や、英語科教員が自作した例²も見られたが、その後国内で導入する大学が増えたこともあって現在では国内で利用できるサービスも増えた。吉田弘子はそれらの中でも利用が多いG-TELP³、TOEIC Bridge⁴、ACE Placement⁵、CASEC⁶を言語テストの妥当性・信頼性・実用性の観点から比較している⁷。

本学でのプレイスメント・テスト導入にあたっては、上記4試験に加えて「英語能力判定テスト」⁸について、それぞれの妥当性・信頼性・実用性、また事務局（教学課）側でも費用や試験から結果返送までの所用日数などを検討した結果、2009年度に「自己診断テスト」の名称で試行実施したNPO法人英語運用能力評価協会(ELPA)のACE Placementを2010年度より正式に導入することとし、新入生オリエンテーションの一環として、入学直

後の全1年生を対象に実施した。

プレイスメント・テストの成績に基づいたクラス分けを行うことで、「総合英語」のクラスを上級・中級・初級の3レベルに分けて開講することが可能になった。

近年は入学試験方法の多様化⁹により学生の基礎学力水準を全学共通の指標で把握することが難しくなっていたが、今後も継続して同テストを利用することで、新入生の英語力、ひいては入学時の基礎学力水準の動向を継続的に把握することが可能となったことは、英語に限らない今後のカリキュラム改訂、その他本学教育の充実に資することは疑いない。

1-1-2 科目構成と履修年次の変更

前号論文2-4で報告したとおり、2009年度まで、本学の英語は総合英語・英作文・英語コミュニケーション・英語演習の4科目を開講し、フランス語・中国語・ハンダ語・日本語（留学生限定）それぞれの初級I・II、中級I・IIの外国語科目に「日本語文章作成」を加えた「リテラシー（語学）」科目（それぞれ半期開講各2単位）のうちから、8単位を全学生必修としていた。

これについて、前号論文4-2で検討したとおり、すなわち、

- 現行の「総合英語」について、プレイスメント・テストを実施して、レベル別にクラスを編成し、
- それぞれ英語以外の外国語科目に準じた「準通年型」履修により時間をかけた指導を行う一方で、
- 2009年度カリキュラムでは「英語演習」枠内で開講されているメニューのいくつかを独立させ、
- 学生の興味を引く教材や、留学や就職活動を意識した内容の科目を設けること、
- そして英語履修により取得可能な単位を増やすことで学習への動機付けを強化し、
- その一部または全部に上級学年向けの指定を行うことで学習の継続を促す。

以上を提案し、ほぼ認められた。その結果、

- 「総合英語」は英語以外の語学に準じた「準通年型」とされ、「総合英語I・II」が開講されると共に、プレイスメント・テストに基づくクラス分けにより上級・中級・初級の3レベルに分けられた。
- 上記により「総合英語」の総コマ数が倍増（12コマ→25コマ）したこともあり、「英作文」は廃止して「総合英語」に吸収。
- 進級した学生が継続して英語を学習するよう誘導するため、「英語コミュニケーション」「英語演習」は2年次以上の履修を指定。
- 「英語コミュニケーション」は引き続き「ネイティブスピーカーによる英語科目」として維持する一方、「英語演習」をABCの3科目に分割、「アートの英語」「英作文・TOEICの基礎（英文法）」「時事英語」の複数科目で単位取得を可能とした。

なお、コマ数の増えた「総合英語」の授業を原則として月・火曜日午前中の語学「コアタイム」¹⁰に集中開講するため非常勤講師1名を増員¹¹、専任1名+非常勤講師5名（うちネイティブスピーカー1名）の体制とした。

上級クラス各学期1コマは筆者が、初級クラス各学期2コマは非常勤のひとりが担当し（3-2参照）、残りの中級クラスを日本人スタッフ5名で分担する体制となった。

また、特に複数教員が担当する「総合英語」中級クラスにおいては、コンテンツの共通化を図るためテキストを共通化した。

1-2 現状における課題

1-2-1 学生からの反響

2010年度も前年度同様「スタディスキルズ」の一環としてプレイスメント・テストの講評を行った。

2009年度は30分強の小講義で講評に加えて「なぜ芸工大で英語（外国語）を学ぶのか」（前号論文1章）について話したところ、肝心なテスト講評に十分な時間が取れなかった反省もあり、今年度は2010年5月1日に、約

270名の履修者を2グループに分け、それぞれのグループにテスト講評と共に90分間かけた講義を2回行う形で実施した。

今回も自由記述式のアンケートにより受講学生の感想を求めた。試験問題の解説を除く総論部分の内容は大筋で昨年度と同様で、受講者の感想もそれほど変わりようがなかったので、概要については前号論文3-2-3を参照願いたい。

それでも、入学直後の時期に、多くの学生にとっては「かなり久々に」英語力をテストされ、その記憶と入学直後の緊張感が薄れぬうちに¹²、多くの新入生に対して「芸工大に来てまで英語／言葉を学ぶ意義」を周知徹底できた意義は大きかった。今年度も前回同様実施した自由記述式のアンケートにも「英語はもちろんのこと、日本語も勉強しなければと思った」といった趣旨のコメントが多数見られた。

ただし、プレイズメント・テスト導入とクラス分けの効果それ自体を学生のコメントから看取するにはアンケートの実施時期が早すぎたとも言え、その効果についての学生の反響を確認するには学期末に実施した「授業アンケート」の集計結果を待たなければならない。

クラス分け以外に、「総合英語」以外の英語科目を2年次以上の履修とした影響の評価についても同様であるが、「ネイティブと話したい」という学生の希望はこの時点のアンケートでも根強かった。

筆者自身は前号論文「まとめ」でも論じたとおり「会話さえできればいい」という意見には必ずしも同調せず、むしろ一貫して入学直後に基礎を徹底的に復習してほしいと願う立場であるが、将来的な取り扱いについては議論の余地があろう。

1-2-2 担当教員の感想と課題

本稿執筆時はまだ新カリキュラムになって最初の期末試験や成績評価が未了のため、データに基づく議論を行うにはまだ無理があるが、前年度までと比較できる経験を有する（2010年度新任でない）講師との意見交換の結果並びに筆者自身の感想を以下にまとめる。

（初級クラスについて）

学生のレベルがかなり揃ったため、「間違いを恐れない」思い切ったクラス運営が可能になり、学生の活気も増したように感じる。（3-2参照）

（中級クラスについて）

引き続きクラス内でのレベル差を感じることも多いが、開講コマ数の増加と同一時間帯での集中開講により受講者の分散を図った分一クラスあたりの人数は若干減った分、クラス運営がしやすくなったとは言える。

（上級クラスについて）

上級クラスは筆者自身が担当している。

中級よりもかなり難易度の高いことをやっているにも関わらず、実力最上級レベルと思われる学生からは「まだまだぬるい」と言わんばかりの視線を感じることもあり、冷や汗をかくことも少なくなかった。

授業方法の試みのうちいくつかについては後述するが、上級クラスについては学生たちにも自らの英語力に自負があるためか、中級クラスに比べてプレイズメント・テストで振り分けられた者の「歩留まり」が履修登録・出席状況共に、中級クラスよりかなりよい。このため2010年度前期は結果的に中級クラスより上級クラスの受講人数が多くなってしまった。

「トップレベルの少人数を徹底的にしごく」つもりでいたクラス分けの真価が十分に発揮しきれていない印象が教える側の筆者にもあり、それが上記の「ぬるさ」を咎める視線にもつながっているとも考えられる。このため現在当該授業コマを二分割して一クラスあたりの人数を抑える方向で調整中である。

2 大学院におけるリテラシー教育充実の試み

2-1 「アカデミックリテラシー」の復活

「アカデミックリテラシー」は（シラバスより抜粋）

演習形式で研究計画書作成・論文執筆・プレゼ

ンテーションの作法を学ぶことを通じて、研究者として求められる発信力を身につける。必要な情報を input し、正しく引証しつつその成果を output するための作法を学び、自らの研究の意義を日本語・英語で表現できるアカデミック・スキルを養いたい。

との趣旨で開講される、大学院芸術工学研究科の基幹科目（選択必修科目）である。複数の担当者による半期の授業で、①日本語による研究計画の作成②プレゼンテーションの基礎③英語による academic writing の基礎を網羅的にカバーする形式を採っている。

本講義は筆者の前任者が退職された後不開講となっていたが、神戸市と神戸芸術工科大学が2008年4月に『デザイン都市・神戸』推進のための連携協力に関する協定書を締結し¹³、その神戸市が2008年10月にユネスコの創造デザイン都市に認定されたこと¹⁴、また2009年には世界43か国のデザイン・アート系169大学・研究機関が加盟するコンソーシアム「クムルス(Cumulus)」¹⁵に本学も加盟¹⁶、またモントリオール大学ユネスコ講座「景観と環境デザイン」における国際ワークショップ(WAT_Kobe2009)を本学がホストするなど¹⁷、大学として積極的な国際展開を行っていく流れの中で、「アカデミックリテラシー」を2010年度より再度開講することが決定し、筆者は初めて大学院の授業を担当することとなった。

当該講義は主に入学直後の修士課程1年次を対象とするクラスであること、また筆者の担当が全5回と限られていたこともあり、「自分の研究テーマについて英語で簡潔に(A4用紙1枚で)表現できること」を絶対目標として、授業時間内では日本語及び平易な英語のテキストを使用し¹⁸ paragraph writing の基礎や(MLA, APAなどの)文献引用のスタイルにつき講義する一方、同時進行で受講者それぞれの提出した abstract を個別かつ徹底的に添削する形式で行った。

また、2010年5月19日に行われた総合デザイン特別研究Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ及び総合アート特別研究Ⅳ発表会(修士

課程2年生の研究発表)には受講者全員を出席させた上で、その次の週の授業では発表会予稿集に添えられていた院生たちの abstract を俎上に載せて「切り刻み」、abstract から発表の趣旨(研究テーマ)が伝わってくるもの・こないものはどれか、そしてそれは何故かについて検討した。

筆者の担当5回に加えて、当該講義内で学外講師を招いての特別講義枠3回分も「英語」枠として利用することとなったので、学部の「総合英語」「英語コミュニケーション」の講義をご担当いただいている非常勤講師陣に依頼し、うち2回は「英語コミュニケーション」担当でTESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages) と大学での豊富な経験を持つネイティブスピーカーによる paragraph writing のワークショップ、残る1回は末延岑生講師により「研究者として生き残るために—ニホン英語のすすめ」の演題で、物怖じせず世界に挑む気概を持つことの重要性を説く「元気が出る講義」をしていただいた。

「ニホン英語」については3章でより詳しく述べる。

2-2 院生の個別ニーズに対応するための取り組み

「アカデミックリテラシー」の一環として、学生の研究テーマの abstract につき個別指導を行ったことは既に述べたが、当該科目の復活と、英語教員として筆者が専任スタッフ入りしたことをきっかけに、授業の一環としての個別指導に加えて、受講者から授業関係とは別件で、また受講者以外からも、指導を請われることが急増している。

2010年度前期だけでも、授業関係とは別に

- 院生発表会発表予稿集に掲載する英文 abstract
- 海外での学会発表に持参する資料の英文校閲
- 個展に展示する作品の「コンセプト・ボード」を和英対照とするための英文校閲
- 留学生の自発的なプロジェクトとして進行中の、英語を話す(英語しか話せない)留学生及び留学希望者(国費留学生含む)向けの、英文による大学紹介と生活ガイド

作成作業への助言指導

等の依頼が次々に持ち込まれるようになっており、それぞれ個別に対応している。

2-3 現状における課題

講義再開 1年目の今年度は「走りながら調整」することを余儀なくされた「アカデミックリテラシー」の英語パートであったが、基本的な構図は学部での英語教育が抱える課題と同様で、時間数の絶対的な不足と受講者間の英語力の差である。

また、前号論文 3-2-2でも触れたとおり、英語力・語学力の必要性の認識については院生だけでなくその指導教授間でもかなりの温度差があるため、研究科全体としての対応を採るためのコンセンサスを得ることも容易ではない。

今年度の「アカデミックリテラシー」は受講者数が少なく、筆者による個人指導中心の「力業」で切り抜けたが、より多くの学生が危機感をもって積極的に語学力向上に取り組むことを期待する一方で、数が増えれば現行の体制ではマンパワーが不足するジレンマに直面することは避けがたい。

前節で述べた授業外の個別指導も含めて、大学院生の指導にあたっては当然ながら学部生以上の専門性が必要となる。筆者自身も学部生・大学院生の「下支え」を重視する指導を続ける傍ら自らの「引き出しを増やす」努力はしているものの、アートそれ自体には門外漢である故の限界はいかんともし難い。

加えて、筆者が大学院棟とは離れたデザイン教育研究センター棟に常駐しており、日常的に院生たちと顔を合わせることが少ない環境のためか、院生からの「救援要請」が土壇場になることが多く、本人ともども直前に血眼になって格闘する状況に陥ることも少なくない。

「アートを英語で語れる」スタッフの増強が望まれるところである。これについては 4-4 で後述する。

3 「ニホン英語」の可能性

3-1 「ニホン英語」とは何か

「ニホン英語」とは、本学「総合英語」非常勤講師でもある末延岑生名誉教授（兵庫県立大学）が強く唱道し、2010年7月に本学にて全国大会が開催された日本「アジア」英語学会(JAF AE)¹⁹でも、末延の基調講演を中心に議論された考え方である。²⁰

近著²¹にも繰り返して示されている「ニホン英語」の精神を極めて乱暴に要約すれば、インド英語があり、フィリピン英語があり、そもそも戦後日本の英語教育の標準とされてきたアメリカ英語にしてからが、イギリス人から見たら「アメリカなまり」である。ならば「ニホン英語」があってもいいじゃないか、むしろ「ニホン英語」がいいんじゃないか、それは日本人としての個性である……という「逆転の発想」である。

以下は授業でも話した私事であるが、筆者は学部3年次に母校の交換留学生としてアメリカに派遣されるまで、海外に出たことがなかった。児童英語教室の類にも通ったことはなく、英語を学び始めたのは中学に入学してからであった。ただ英語に対する「耳」は比較的マシな部類、また「口まね」も比較的得意な部類であったようである。

中学時代に通った塾の先生が、ハワイ大学で TESOL の学位を取得してから地元の高校で教えていたという、当時としては珍しい経歴の方で、その方との相性がよかったせいか、筆者の英語は渡米する前からアメリカ英語であったようで、現地でも発音を誉められた記憶がある。

ところが大学院時代にケンブリッジ大学に留学したときには、逆に大学関係者から“You are not speaking English. You are speaking American.”と揶揄されて、非常に不愉快な思いをすることになった。

その一方で、Queen's English で講義する英国人教授に対し、カタカナ風のインド英語や、耳が慣れるまでにしばらくかかったアフリカ系の英語で闊達に質問し議論を挑む院生達も「見慣れた日常」となっていた。

その経験から、本学に赴任する前の仕事でケンブリッジへの海外研修の引率をしていた頃には、既に学生達に「どう頑張ってもわれわれが話す英語はしょせん Japanese

Englishであり、アメリカ英語とイギリス英語の発音の区別に日本人が思い悩んでも意味はない」と説明していた記憶がある。

JAF AEは「英語の国際化と多様化、とりわけアジア地域を中心とした英語の普及と変容の諸問題に取り組む」学会であるが、その精神は「アジアデザインの特性と魅力をフィールドワークと比較研究活動をとおして明らかにし、その成果を世界に発信」²²することを目的として2010年4月に設立された、本学アジアデザイン研究所のそれとも通じるものがある。

日本人が世界と向き合うにあたっては、アメリカのWhite Anglo-Saxon Protestantな価値観と直結しているアメリカ英語にこだわるよりは、むしろ「日本の個性—ニホン英語」を使うことで、アメリカ（の中の、WASPも含めた多様なエスニック集団すべて）とも、アジアを初めとする国際社会のどの文化・どの民族とも、等距離で対等な関係を結ぶことができるのではないだろうか。²³

このように考えると、「日本人の英語」は「誤った（下手な）英語（米語）」ではなく「ニホン英語」なのだ、と発想の転換を迫る、メインストリームの英語教育界においては現在も「邪道」扱いされがちな末延の議論も「自然体」で受け止められるし、本学の英語教育においては必要な考え方であると理解される。

3-2 学部レベルでの可能性

現在本学「総合英語」の初級レベルは、全面的に末延教授に預けた形になっている。自らを省みて、筆者は何事も「形から入る」のを好むタイプなので、以下の理論の正当性を理解していても、学生の言い間違い（エラー）にまだ同氏ほど寛容になりきれていない自分を自覚しているためである。その理論とは以下のとおりである。

エラオロジーerrorologyとは「ニホン英語」を唱道する末延の造語で、「英語教育界ではエラーとみなされ、通じないといわれるニホン英語ではあっても、それが実際には世界でどの程度通用するかといった研究をする学問」と定義しうるものである。²⁴

エラオロジーの実験例として末延は、大学生に連続し

た絵を英語で説明させ、その発話率とエラー率から、被験者を4つのタイプに分類した²⁵。すなわち、

- A群：発話率は高いがエラー率も高い
- B群：発話率は中程度だが、エラー率は最も低い
- C群：ほとんど発話せず、エラー率は高い
- D群：発話率もエラー率も中程度

指導の対象がA群のような楽観的学習者ならばエラーの指摘から本人が学習する可能性は高いが、C群のような口の重い学習者が口を開いた瞬間に遮って、文法や発音のエラーを「矯正」してしまつては、更に口が重くなるリスクの方が大きいので、細かく咎めだてせず続けさせることが肝要となる。²⁶

ここで留意しなければならないのは、本名信行の指摘するとおり、「ニホン英語」を受け入れると言っても、「間違い」を教えるのではない²⁷ということである。すなわち、「ニホン英語というのは日本人が英米英語（あるいはその他の国際標準英語）を見本に勉強し、その結果として獲得した英語パターンなのである」。

これを受けて、筆者も1・2・1の「スタディスキルズ」2010年度版講義などでは「勉強するときには「型」を覚える、でも話すときには通じればよい」と指導している。筆者は末延の境地にまでは未だ達していない²⁸が、自身の担当クラスにおいても、忍耐強く学生のoutputを引き出す姿勢を心がけている。

酒井志延は、難関校から基礎教育が必要な学校まで13大学の1,2年生3,578名を対象に行った調査をもとに、学習ストラテジーの使用の差が上、中、下位を分離しているが、メタ認知的活動、自己効力感の感じ方、学習者としての自立性について、上位は他と分かれるものの中位と下位は明確に区別できない、すなわち「中位の英語学習に対する意識が遠ざかり、下位に近づいている」と警鐘を鳴らしている²⁹。これは末延実験でいうC群の学生が将来的にさらに増加することを予感させる結果であり、今後末延の勤める“error-tension free”な環境を作り出す能力、あるいは覚悟が、中級クラス以上においても求

められることも想定しなければならないであろう。

3-3 大学院レベルでの可能性

大学院生の場合、在学中に院生が海外の大学院生と英語でコミュニケーションを取る必要に迫られる事態は、当然ながら学部生より多く生じる。英語力が不足している者については2章で述べたごとく最終的には個別指導の「力業」で対応するしかないが、ある程度の運用能力を既に持っている者には、また違った悩みが生じる。

ここで再び筆者自身の経験になるが、学生時代、留学前に通った英会話学校で、米語ネイティブスピーカーの講師から「君の英語は文法的には正しいし、語彙もこのクラスの学生では多い方だ、だがどこかおかしい」と言われた経験がある。「おかしい(funny)」の意味を聞き返すと、たとえて言うなら周囲が普通に日常会話をしている中で、ひとりだけ時代劇のごとく「左様でござるか」と言っている印象でもあったらしい。

ここから本学の事例になるが、ある国際ワークショップに参加し、無事やり遂げた本学大学院生も、これと類似の体験をした。その院生は、参加したワークショップで共同研究を行った海外の大学院生（英語が母語ではないが、英語で議論した経験は十分に持っている）から、共同でまとめるために書いた文章の英語を「お前の英語は教科書のようだ（面白くも何ともない）」と揶揄され、疎外感を味わったという。

幸い当該院生は、筆者に上記を愚痴りつつも、言われた相手には「Nani yutennen! (何言うてんねん)」と大阪弁でやり返す胆力の持ち主であったので、相談された筆者も拍手するだけで済んだのだが、このとき筆者が強調したのは『教科書のようだ』とは本来誉め言葉であるべきで、卑屈になる必要はまったくない」ということである。

この現象について末延は、

日本の文化を土台に、日本語の影響を受けた「ニホン英語」は、簡単に言えば、単語ひとつひとつを五十音図の音声体系に従って、そのま

ま丁寧に発音する、いわば「カタカナ英語」で、英語の方言の一つとして古くから存在している。

（中略）

端的に言えば、日本人にとってニホン英語とは、ネイティブの「筆記体」に対する「活字体」のようなもので、丁寧過ぎるくらいに誰にでもわかる。英米の英語が芭蕉の「草書」なら、「ニホン英語」は小学生の「楷書」くらいなもの。芸術の世界では、草書は確にかっこいいかもしれないが、誰も読めないのでは困る。

と喝破しており³⁰、2-1で紹介した大学院特別講義においても、出席した院生達に同趣旨の檄を飛ばすと共に、経験に基づき、国際学会などでの英語発表を「図々しく生き残るための裏技」をいくつか伝授していただいた。

4 「英語以前の問題」に対応するために

4-1 「英語以前の問題」とは

「英語以前の問題」とは、筆者が担当授業の初回オリエンテーションや「スタディスキルズ」での講義で毎回指摘する（前号論文1章で紹介した）「言葉の力」の問題、すなわち「辞書を引いて用意しているかどうかではなく、話の文脈が正しく読みとれているかどうかの問題で、その意味で「英語以前」または「別次元」の問題である input 能力の問題と、「持っている情報や意見を、いかに説得力を持って相手に伝えるかの問題」である output 能力の問題である。

このうち英語の output の問題については、前章の「ニホン英語」の思想と手法が学生にとっては福音となるはずであるが、本章ではそれ以外に筆者が試みたいいくつかの取り組みについて述べ、その意味について論じたい。

4-2 Input 能力向上の試み：

「ボクにも読めた New York Times」

前号論文1章でも紹介したとおり、筆者はこれまで、英語の勉強法として「時事英語（英語演習C）」に限らず、

「日本語で聞いた、読んだことがある話なら、英語で聞いても読んでも何となくはわかるし、わからない部分の想像もできる。英字新聞を読みたければまず日本語の新聞を読み、テレビのニュースを見ろ」と学生に檄を飛ばしてきた。身近な素材の英語長文を想像力を駆使して読む訓練は、3章で紹介した「ニホン英語」的アプローチの中で末延講師も実践している手法³¹である。

過去には2009年5月に新型インフルエンザ流行で本学をはじめ学園都市にキャンパスを持つ大学が一斉休校になった直後に、新型インフルエンザの感染予防についてを英語で学習するなどの経験もあったが³²、2010年度前期には、筆者の授業の中でも、学生の立場からすると少し荒っぽい授業形式を、「総合英語Ⅰ」の中級並びに上級クラスと、新聞英語を読む「英語演習C」の学生に試してみた。

すなわち、2010年6月、鳩山由紀夫総理大臣の突然の退陣に続く菅直人民主党代表の選出³³と、続く7月の参議院選挙で民主党が惨敗した時³⁴のNew York Timesの記事を、それぞれ直後の週の授業で「ぶっつけ本番」で配布して、筆者といっしょに辞書も使わず無理矢理読んでしまった試みである。

ここでJapan Timesなどの日本の英字新聞を教材として使用せず敢えてNew York Timesを使ったのには、二つ理由がある。

ひとつは「ボクにも読めたNew York Times」などとうそぶくおと、学生にアメリカを代表する高級紙の一つである同紙を、ろくに準備もせずとにかく読んでしまう、という体験をさせたかったことである。

上記どちらの記事の元ニュースとも、前週にテレビを特に意識せずかけっ放しにしていただけで「うんざりするほど」聞かされていたはずである。加えて読み込みを始める前には筆者もおさらい的な説明をしている。後者の記事は前者より長かったが、同じニュースについての日本語の新聞記事（英文記事の和訳ではなく、あくまで素材が共通しているだけ）を先に読ませた上で「本番」に臨ませた。また当該記事2本は同じ記者が書いていたため、共通の言い回しも多かった。

固有名詞については事前にひととおり説明したので、不明な単語が虫食い状態であっても『その名前』が出てくる周囲は『このネタ』のはず」と「当たりを付ける」ことは比較的容易な筈である。これで覚悟していたよりすんなりと読めたと思えば自信になるし、七転八倒することになっても「天下のNew York Timesが相手ではわからないところがあっても仕方がない」と心理的な逃げ道もいちおう用意しておける。

ここで筆者が同紙記事を選んだ二つ目の理由であるが、New York Timesといえども読者は日本通ばかりではないので、書かれている内容は国内発行の英字紙よりむしろ簡単な（大雑把な）印象を筆者が受けたためである。首相交代の記事においては新総理の人となりなどの細部、参議院選報道の記事においては消費税増税論議や普天間基地移設問題の込み入った部分には、どちらもそれほど踏み込まずに書かれており、テレビのニュースの内容を越える中身はそれほどない。実際に読んでみて、New York Timesの方が日本国内で発行される英字新聞であるJapan TimesやDaily Yomiuriが同じニュースを扱った記事よりも読みやすく思われたのは、筆者にとっても新鮮な発見であった。

授業においては、どの授業のどちらの回も、まず筆者が「先週のニュース」をおさらいした後で、（後者の記事については日本語の関連記事も読ませた後で）英文記事で「辞書は引かず、とにかく最後までたどり着くことが優先」で読ませた上で、筆者の解説で読み進めていくが、内容理解の確認を兼ねて、本文中に出てくる識者や市民のコメント部分など、平易な英語で書かれている部分について、適宜学生に確認した。

かなり強引ではあったが、日頃の授業でも極少数（2010年度前期は2名）で英字新聞の記事を集中的に読ませている「英語演習C」、「総合英語」上級・中級の順で理解度は高い印象であった。

当てられたときにもっとも苦労していた中級クラスの学生も、筆者が直前（状況によっては直後）の文章の意味をヒントとして再確認することで、概ね正しい理解にたどり着くことができた。

4-3 Output 能力向上の試み

4-3-1 「旅行英語」における寸劇型テスト

Output 能力向上の試みとしては、第一に「旅行英語を学ぶ」というテーマで開講した、2009 年度後期の「英語演習」を採り上げたい。

休みにアメリカにいる友人に会いに行く主人公達の体験を描いたテキストを使い、海外で実際に遭遇しうる状況での実践的な表現を練習させたが、その試験として、授業で扱った表現を「書かせて確認する」紙ベースの学期末試験とは別に、単なるテキスト音読ないし暗唱ではなく、二人一組の寸劇形式でテキストの会話を再現するテストを行った。

受講者には、前週にペアを作り、履修したレッスンのダイアログ部分について、丸暗記でもいいが自分たちの状況（名前・性別）その他につき、適宜アレンジした上で再現するように指示しておいた。

試験順は当日サイコロでランダムに選んで決定し、どの Unit のダイアログが当たるかは当たった本人達にその場でサイコロを振らせて決めるスタイルを採ったので、試験を受ける側はまんべんなく準備せざるを得ない。

演じる Unit が決まったら 30 秒だけテキストの見直しその他打ち合わせをした上で、テキストを置いてダイアログを再現するように指示した。

ダイアログをキッチリ丸暗記し、名前など必要最小限の変更で切り抜けるペアがいる一方、打ち合わせにないアドリブを入れてパートナーに冷や汗をかかせつつも、助け船も自分で出してどうにか切り抜ける強者もおり、順番待ちをする学生達にも、緊張感漂う中でも他の学生の奮闘を楽しむ和やかな雰囲気があった。

試験する側の筆者が内心恐れていた「準備不足で立ち往生」する者は幸いほとんど出ず、試験する側もされる側も達成感のあるテストを行うことができた。学期末授業アンケートでの評価も概ね好評であった。

受講人数が少なめの「英語演習」枠だからできたとも言えるが、また試してみたいテスト方法である。

4-3-2 「みっくすさいだー」

@SIFE Japan 国内大会 2010

2 つめの事例として、前号論文 5-2 で採り上げた本学芸術工学研究所「イーブン・アート・プロジェクト」のオリジナルブランド「みっくすさいだー」³⁵が、前年に続き 2010 年も、学生の社会貢献ビジネスの成果を競う SIFE Japan³⁶国内大会に出場した事例につき報告する。

今年度はルール変更により国内大会の使用言語が日本語となった。英語科教員としては複雑な思いもあったが、筆者も終研究員を補佐する Faculty Advisor として引き続き指導に加わり、5 月下旬から 7 月の本大会に至るまで、学生のプレゼンテーションを指導した。

昨年準優勝校と予選リーグでぶつかり惜敗したもののそのビジネスモデルの完成度の高さが評価されていた「みっくすさいだー」は、メンバーは昨年から入れ替わっていたものの、大阪商業大・滋賀県立大・滋賀大と共に参加した 2010 年 6 月 19 日の関西プレ大会（於・龍谷大学）で関西 2 位となった。³⁷

プレ大会の時点ではまだぎこちなさが残ったプレゼンテーションであったが、当日の質疑応答で指摘された疑問点についての回答を反映して、連日連夜発表原稿・配付資料・プレゼンテーションスライドを修正・改良しつつ、終研究員と筆者の指導で直前までプレゼンテーション練習を続けた。結果、7 月 2~3 日の本大会（於・国立オリンピック記念青少年総合センター）では準優勝を勝ち取った。³⁸

本大会の予選リーグは

<リーグ 1> 会津大学、沖縄大学、立教大学、
大阪商業大学

<リーグ 2> 滋賀県立大学、慶應義塾大学、
早稲田大学、神戸芸術工科大学

<リーグ 3> 同志社大学、沖縄国際大学、滋賀大学

<リーグ 4> 京都大学、広島修道大学、琉球大学

の 14 大学で争われ、上記下線の 4 大学が翌 3 日の決勝に出場した。³⁹

最終的には2006年度準優勝、2007年度優勝の経験を持つ滋賀大学 SIFE チーム⁴⁰の豊富な経験と気迫に一步譲ったが⁴¹、決勝進出4大学のうち3大学がプレ大会に出場した関西圏の大学であったこと、それも各チームとも社会的には「一流大学」と評価される諸大学を破っての決勝進出であることは、各チームそれぞれの「素材」としてのビジネスモデルの良否だけでなく、学生が十分なブラッシュアップの機会を持てるかどうか、指導教員と大学が十分なサポートを提供できるかどうかにか左右されることを改めて証明したと言えよう。⁴²

4-4 全学的な連携の必要

4-4-1 学内関連部署との連携の必要

これまでに述べてきたような、「英語以前の問題」を含む学生の幅広いニーズに対応するためには、全学的なネットワークを整備し、学内各部署間の連携を更に強化していく必要がある、というのが筆者の意見である。

現状はそこまで組織的なものではなく、個々のプロジェクト単位での、かつ担当者レベルでの連携であるが、2010年度英語科関連での成功例としては、キャリアセンター主催の「TOEIC 対策講座」との連携が挙げられる。

英語科授業のオリエンテーションにあたり、キャリアセンター主催の当該講座について英語科から紹介したところ、平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム⁴³に本学の「デザイン・アート系大学における就職意識向上プログラムの構築」事業が採択された⁴⁴一環として、今年度は当該講座を拡大実施するため学生の積極的参加を促すべく周知に協力されたいとの依頼を受けた。

筆者から英語科全講師陣に要請して、学部英語科全授業と「スタディスキルズ」並びに大学院「アカデミックリテラシー」で積極的に周知し受講を奨励した結果、同講座開講以来最多の学生が受講し、特に同講座開講以来はじめて大学院生が多数受講するなどの改善が見られた。

今回は筆者と担当部署の個人的な接触が期待以上の成果に結びついたが、継続的な効果を上げるためには、教員組織・事務局の別を問わず、学内組織の有機的な連携

を強化し、「既にあるのに知られていない」がために既存のサービスが活用されないといった、限られた学内リソースを無駄にする事態を生じることなく、学生のニーズに応える仕組みを整備していかなければならない。

4-4-2 学生の個別ニーズに対応する仕組みの必要

筆者自身の個人的取り組みについては2-2並びに2-3でも述べたが、大学に学生個人の能力や気質に応じきめ細かな指導が求められ、大学が学生に対する「面倒見のよさ」を競う観さえある昨今の風潮⁴⁵に加え、デザイナー・アーティスト・クリエイターの卵たちの集団である本学学生・院生のニーズは一般の大学以上に多様であり、授業の一環としてだけでなくすべてに対応することには無理があるというのが筆者の感触である。

それぞれの専門分野の作品や論文についての最終的な指導は各所属学科または指導教員が行うことになるが、その前提、あるいは基礎となるレベルにおいても、学生のニーズが多様を極めていることには変わらない。特に前号論文から筆者が指摘する学生（大学院生も含む）のinput/output能力向上のためには、少なくとも日本語と英語について、学生の情報収集・整理と理解・発信の個別ニーズに対応した指導助言を行うスタッフが常駐するサービスの必要性は、今後更に高まってくると思われる。

現在本学デザイン教育研究センターには教職指導室があり、教職課程関係の資料を閲覧に供すると共に、担当の特任教授が常駐して課程履修者に対する相談に対応している。センター棟にはコンピューター自習室もあり、学生が課題作成などで利用している。図書館にはグループスタディールームがあり、学生のグループ学習が可能である。

これらがひとつになったようなスペースに、日本語・英語を中心に学生の「読む力・書く力・発信する力」の向上をサポートするスタッフも常駐する「駆け込み寺」が、今後必要になってくるのではないかと、というのが、筆者のイメージである。

近年、新しい大学教育のかたちを模索する動きとして、

- ラーニングスタジオ（能動的な学びを支援する機能

が強化された、スタジオ型教室)

- ラーニングcommons (情報を活用した学びの場として、図書館を強化充実させる)
- コミュニケーションスペース (大学内の人々、また大学と地域の人々との交流を促す空間を作り出すことから新たな学びを誘発する)

といった、「学びの空間」を整備する試みも増えているが、こういった取り組みとの組み合わせも考えられよう。

4-4-3 デザイン教育研究センターの役割

個性的な学生が集い、現在も在学中から多彩な活動で輝かしい成果を挙げている本学学生・大学院生たちであるが、4-3で紹介した「みつくすさいだー」のように、大学としてのサポート次第で「世界に手が届く」ところまで来ている学生・院生たちは他にもまだ多数いる気がしてならない。

その原石を掘り出し、磨きをかけるのは各学科・大学院の役割であろうが、アーティスト・デザイナー・クリエイターの卵達に、本学の設置母体である谷岡学園が建学の理念とするいわば「世に役立つ人物」⁴⁶として活躍するためのライセンスを与えるのが、基礎教育を担当するデザイン教育研究センターの役割である。

初代学長・吉武泰水は、神戸芸術工科大学の教育理念を策定するに当たり、自らのデザイン観を基礎とし、「もののデザイン」以前の「ことのデザイン」を重視し、対象・内容・具体的デザイン行為のあり方のすべてを視野に入れた「総合的デザイン」を「芸術工学」の対象とした。

これに地元神戸市とその産業界からの、時代や社会情勢の急激な変化への対応への要請が加わったとき、必然的にそのカリキュラムは「人間を囲むすべての対象環境を扱う」学際的なものとなった。⁴⁷

開学当初の環境デザイン学科(現・環境・建築デザイン学科)主任・第2代学長の鈴木成文は、その教育理念を

1. 人間を基本としたデザイン教育
2. デザインプロセスの学習の重視
3. 技術と感性の両立

4. 体系的知識の習得と体験的学習の並行
5. 共同作業によるデザインの重視
6. 語学力・コンピュータ利用能力の育成

の6項目に整理し、「あらゆる機会を通じて人間そのもの、生活及び社会を学習するよう誘導する」必要を指摘している⁴⁸。

上記からも理解されるとおり、開学以来、本学の専門教育は幅広い教養教育・基礎教育の上にこそ成り立つものであると認識されてきた。開学当初のこの方針の徹底ぶりは、例えば環境デザイン学科では1年次には専門科目の実習を課さず、開学当初は第2外国語まで必修であった(前号論文2章参照)外国語を含む基礎的学習を優先する徹底ぶりであったことから看取される⁴⁹。1989年開学時の「一般教育」(語学を含む教養講義科目)・「共通専門」(コンピュータ言語・デッサン・図学製図などの演習科目)に分かれていた基礎教育領域が1993年のカリキュラム改訂で「教養分野」に統合、その後2005年にデザイン教育研究センターが設立され、

- 教養 (大学生として学ぶべき自然・文化に関する広範囲な教養科目)
- 芸術工学基礎 (芸術やテクノロジーに対する教養を養うことを目的とした本学独自の科目群)
- リテラシー (語学) (英語・フランス語・中国語・ハンガール・日本語 (留学生のみ)・日本語文章作成)
- リテラシー (コンピュータ) (コンピュータ演習等)

の4領域に再編された⁵⁰現在も、その所管する基礎教育の重要性と、期待される幅の広さ、そして基礎教育の中で英語以外の外国語や日本語も含むリテラシー科目の重要性や、リテラシー科目以外の教養科目との関係性も、

- 語学を学ぶことは、デザイナー/アーティストとしての「引き出し」を増やすことである。
- 顧客が何を求めているかを正しく理解してデザイン/製作に当たるためにも(input)、自らの問題意識を顧

客に理解してもらうためにも(output)、「言葉による表現力」にも磨きをかける必要がある。

- 言葉は道具であり、発信する前に、まず発信源たる学生自身の「中身」（としての教養）を充実させることが肝要である。

前号論文1章で論じた、上記のとおりであり続けてきたと
言うことができる。

その一方で、1991年のいわゆる「大学設置基準の大綱化」にともない、設置基準から「一般教育」の名称がなくなったことに象徴されるように、多くの大学においてはその教育カリキュラムにおける教養教育の比重が低下し、本学もその例外ではなかったことも、前号論文の「まとめ」においても筆者が

本学における英語、あるいは語学教育における究極の命題は、「大学の性格上、英語(語学)教育が最優先事項となることを期待することが困難な環境下において、『どこまでやるべきか、できるか』』ということに尽きる。

と指摘したとおりである。

これについて、本学まんが表現学科（旧・先端芸術学部まんが・アニメーション専攻）のカリキュラム構築の理論的支柱であると同時に、学生指導の現場では「鬼軍曹」役も務めておられる大塚英志教授は、2006年の同学科開設から1期生が卒業するまでの学生達との4年間を綴った近著で

専門学校の方が直接役に立つ技術を教えてくれる、という印象が分野を問わずあるようだ。そして同じ「実用性」を大学にも求めてくる。この傾向は大学が職業訓練校しつつある現在、当然のことなのかもしれないが、しかしそうした「目的」に即、結びつかないものは「役に立たない」という考え方に、ぼくは少しだけ危惧を覚える。

（中略）

ぼくにとって大学で教えるということは、「直接、役に立たない」と学生が考えることをそれでもどう教えていくか、という、ある意味で「教養課程の復興」とでもいう側面が実はある。

と述べている⁵¹。筆者とデザイン教育研究センター（の「芸術工学基礎」以外の科目の担当者）もまた、まさにこの問題のただ中にあると言えよう。

大学の外の世界においては、教養教育・初年次教育をもって、大学の教育力を評価する指標とする試みが登場している。

前節では英語科と事務局の連携を例にとったが、所属学科・大学院を問わず、すべての学部生・大学院生の、「専門教育以外の教育ニーズ」に応える全学ネットワークの情報ハブをどこに置くべきかを考えると、既存の学内組織の中では、全学的な基礎教育を所管するデザイン教育研究センターがその中核となっていくことは、自然な流れであるように、筆者には思われる。

おわりに

前号論文の時点で既にその傾向は自覚していたが、英語科唯一の専任教員として、学生の英語力向上への取り組みからは逃げも隠れもできないしするつもりもないものの、本稿にもにじみ出ているとおり、考えれば考えるほど、「英語についてだけ頑張ってもどうにかなるものではない」というのが、現在の率直な思いである。

筆者の授業ではテキストのレッスンに関連した本が回覧されることも多いし、折々の時事問題に関連したニュース素材を配布し、英語を教えるドサクサに時事問題を語っていたりもする。担当授業初回のオリエンテーションで配布する参考文献リスト（多くは図書館で購入済である）のかなりの部分は英語というよりまさに「スタディスキルズ」関連本や時事問題・一般教養関連である。

大学には大学の、専門学校には専門学校の、それぞれに良さも強みもあるが、「大学と専門学校を分けるのは教養課程（基礎教育）の存在である」、その自負こそが、基

基礎教育を担当する教員のプライドである。

本稿は、基礎力の下支えと input/output 能力の向上を通じて学生達のさらなる飛躍をいかに支援するか、その思考過程の一部であると共に、「直接、役に立たない」と断じられがちな領域に携わる教員が、「脇を締めて歯を食いしばり、ときには己を捨て、何よりもチームの勝利を目指す、曖昧だけれど重要な「力」＝「脇役力」（ワキヂカラ）⁵²を摩滅させることなくどう生かすか、その試行錯誤の軌跡でもある。

本稿並びに今後の展開に引き続きご意見を賜れば幸いです。

謝辞

前回同様、本稿における論考、そしてその前提となる英語科カリキュラム改訂とその運用については、「総合英語」をご担当いただいている末延岑生講師（兵庫県立大学名誉教授）ほか英語科非常勤講師各位と、語学部門の先任である西村太一教授ほかデザイン教育研究センター教員各位、並びに実務を担当される教学課各位から貴重なご指摘をいただくと共に、運用面においても引き続き大変なご尽力・ご協力をいただきました。

2010 年度も終伸江研究員を補佐して Faculty Advisor として指導する機会を得た「みつくすさいだー」の学生諸君が、本文のとおり SIFE 全国大会でみごと準優勝を勝ち取った経験からも、多くのことを学ぶと共に、自らのアプローチに後押しを得た思いです。

以上に加えて、試行錯誤を続ける筆者に公式・非公式を問わずご助言と激励をいただいたすべての教職員・関係者各位と、筆者の英語授業・「スタディスキルズ」での講義・大学院「アカデミックリテラシー」の授業などを受講、あるいは個別指導の機会を持つ中で、アンケートやヒアリングに限らずさまざまな意見を寄せてくれたすべての学部生・大学院生諸君にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

参考文献

（前号論文）

岡村光浩、「神戸芸術工科大学における英語教育について－現状と展望」、『芸術工学 2009（神戸芸術工科大学紀要）』、2010 年、

<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>、

最終アクセス日 2010 年 7 月 30 日

（神戸芸術工科大学とその教育について）

『神戸芸術工科大学開学二十周年記念誌』、2008 年
鈴木成文、『体験的デザイン教育論－神戸芸術工科大学環境デザイン学科の 10 年』、神戸芸術工科大学環境デザイン学科、1998 年

鈴木成文、『デザイン大学 学長日記』(I-III)、神戸芸術工科大学、2000-2002 年（年度版）

鈴木成文、『文文日記 日々是好日』(I-VII)、文文会 KOBE、2003-2009 年（年度版）

土肥博至、『学長の部屋－神戸芸工大の 6 年』、神戸芸術工科大学、2008 年

（2-1 大学院「アカデミックリテラシー」テキスト・補助教材等）

上村妙子、大井恭子、『英語論文・レポートの書き方』、研究社、2004 年

九州大学大学院言語文化研究院 英語 I 共通教科書編集委員会編、『A Passage to English－大学生のための基礎的英語学習情報』第 5 版、九州大学出版会、2000 年

崎村耕二、『英語論文によく使う表現』、創元社、1991 年
専修大学出版企画委員会、『知のツールボックス－新入生援助（フレッシュマンおたすけ）集』改訂版、2009 年

吉田知子、『アカデミックライティング入門』、慶應義塾大学出版会、1998 年

（3 章ほか 「ニホン英語」関連）

末延岑生、『ニホン英語は世界で通じる』、平凡社（平凡社新書）、2010 年

長尾素子、『ジャパニーズ・イングリッシュでどこが悪いの？』、北星堂書店、2009 年

長谷川恵洋、『英語戦争－アメリカ主導型英語と日本主導型英語の戦い』、文理閣（阪南大学叢書）、2007 年

本名信行編著、『事典 アジアの最新英語事情』、大修館書店、2002 年

本名信行、『世界の英語を歩く』、集英社（集英社新書）、
2003年

Honna, Nobuyuki. *English as a Multicultural Language
in Asian Contexts*. Tokyo: Kuroshio Publishers, 2008

Murata, Kumiko, and Jennifer Jenkins, ed. *Global
Englishes in Asian Contexts*. Houndmills, UK:
Palgrave Macmillan, 2009.

Suenobu, Mineo. *Errorology in English*, Kobe: Yuetsu
Shobo, 2002

(4-4-2 「学生の個別ニーズに対応する仕組みの必要」
関連)

石渡嶺司、『最高学府はバカだらけー全入時代の大学「崖
っぷち」事情』、光文社（光文社新書）、2007年

山内大地、『下流大学に入ろう！』、光文社、2008年

山内大地、『こんな大学で学びたい！ー日本全国 773 校探
訪記』、新潮社、2010年

山内祐平編著、『学びの空間が大学を変える』、ポイックス、
2010年

(4-3-2 SIFE 関連)

Lichtenstein, Nelson. *The Retail Revolution*. New York:
Metropolitan Books, 2009.

Moreton, Methany. *To Serve God and Wal-Mart: the
Making of Christian Free Enterprise*. Cambridge,
MA.: Harvard University Press, 2009

(4-4-3 デザイン教育研究センターの役割関連)

天野郁夫、『大学改革の社会学』、玉川大学出版部、2006
年

大塚英志、『大学論ーいかに教え、いかに学ぶか』、講談社
(現代新書)、2010年

河合塾、『初年次教育でなぜ学生が成長するのかー全国大
学調査から見えてきたこと』、東信堂、2010年

友野伸一郎、『対決！大学の教育力』、朝日新聞出版（朝日
選書）、2010年

註・引用文献（Web サイトについては特に記述のない限
り 2010年7月30日に最終確認）

1 土平泰子、熊澤孝昭、「英語教育改革プロジェクトにお
けるプレイスメントテストに関する考察」、『茨城大学人
文学部紀要 コミュニケーション学科論集』第13号、2003
年3月、pp. 23-46

2 高階 悟、「大学生の英語基礎学力向上計画の実践」、『
秋田県立大学総合科学研究集報』、第7号、2006年、
pp. 85-94.

3 <http://www.g-telp.jp/>

4 <http://www.toEIC.or.jp/bridge/>

5

<http://english-assessment.org/products/test/placement.html>

6 <http://casec.evidus.com/>

7 吉田弘子、「英語プレイスメントテスト分析ー言語テス
トの観点から」、『大阪経大論集』第60巻第2号、2009
年7月、pp. 93-103.

http://www.osaka-ue.ac.jp/gakkai/pdf/ronshu/2009/6002_ronko_yoshida.hiro.pdf

8 日本英語検定協会（英検）の運営による。

<http://www.eiken.or.jp/placement/>

9 最新の入試情報については、本学公式 Web サイトの以
下を参照。<http://www.kobe-du.ac.jp/exam/>

10 筆者による仮称。

11 増員とは別に非常勤講師1名が退任され欠員を補充
したため、合わせて2名が新任となった。

12 2009年度の実施は6月27日と遅くなってしまっ
たが、これは神戸市内での新型インフルエンザの流行に伴
い5月に臨時休校があったためである。

13 神戸市記者提供資料、「神戸芸術工科大学と神戸市と
の『デザイン都市・神戸』推進のための連携協力に関す
る協定書」の締結及び調印式の開催について、2008
年4月14日、

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/oshirase/ba ckno/2008/img/20080414gp01.pdf>

14 神戸市記者提供資料、「神戸市がユネスコのデザイン
都市に認定～アジアで初めて創造都市ネットワークに加
盟～」、2008年10月22日、

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/oshirase/ba ckno/2008/img/20081022gp01.pdf>

15 <http://www.cumulusassociation.org/>

16 神戸芸術工科大学、「クムルス加入について」2009年
6月15日、<http://www.kobe-du.ac.jp/2009/06/6455/>

17 神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科、「国際ワ
ークショップ WAT_Kobe2009 開催のお知らせ」、2009年11
月20-27日、

<http://www.kobe-du.ac.jp/env/2009/000463.php>

18 使用したテキストについては「参考文献」の該当項目
を参照。

19 The Japanese Association for Asian Englishes.

<http://www.jafae.org/>

20 第26回 JAF AE 全国大会は、筆者を実行委員長とし、末延教授の「日本の個性—ニホン英語—」を基調講演として、2010年7月3日、神戸芸術工科大学にて開催された。当日のプログラム等は以下を参照。

<http://jafaekobe.intlcafe.info/>

21 末延岑生、『ニホン英語は世界で通じる』、平凡社（平凡社新書）、2010年。

22 神戸芸術工科大学「アジアデザイン研究所」
http://www.kobe-du.ac.jp/about/organization/asian_design/

23 See Honma, Nobuyuki. English as a Multicultural Language in Asian Contexts. Tokyo: Kuroshio Publishers, 2008, pp.159-161.

24 末延前掲書、p. 83.

25 See Suenobu, Mineo. “Linguistic and Psychological Analysis of Speech Errors.” From Error to Intelligibility in Errorology in English, Kobe: Yugetsu Shobo, 2002, pp.105-114.

26 Ibid., pp.112-114.

27 本名信行、『英語はアジアを結ぶ』、玉川大学出版部、2006年、p. 165.

28 末延教授は本学で教える傍ら、神戸市内の高校でも英語を教えてこられた。ある高校では氏が担当した時代に英検2級の合格者数が飛躍的に伸びたとのことである。僭越な申し上げようになるが、対象がそれを求めているならば「合格請負人」としても振る舞うことができるし、その指導法も択一式の（エラーを許さない）試験であっても結果を出すこともできるものであることを、教授の名誉のために念のため明記しておく。

29 酒井志延、「大学生の英語学習意識構造について—自立した学習者を育成するために（上）（下）」、『英語教育』、（上）2010年1月号、pp.66-68、（下）2010年2月号、pp.62-64.

30 末延前掲書、pp.96-97.

31 末延同書、pp.175-177.

32 See: Okada, Harue, Pandemic Influenza Prevention Manual. Tokyo: Gendai Kenko Shuppan, 2009.

33 Fackler, Martin. “Japan Elects a New Premier, Fifth in Four Years.” NYTimes.com, June 4, 2010.

<http://www.nytimes.com/2010/06/05/world/asia/05japan.html>

34 Fackler, Martin. “Japan’s Ruling Party Suffers Setback.” NYTimes.com, July 11, 2010.

<http://www.nytimes.com/2010/07/12/world/asia/12japan.html>

35 <http://www.mixsider.com/> 前号論文とその文中で紹介した文献のほか、以下を参照。終伸江、「「みっくすさいだー」ブランドビジネスの挑戦」、アートミーツケア学

会誌『アートミーツケア』、Vol.1/2008、2009年、pp.126-132.

36 SIFE については、前号論文と公式 Web サイト <http://www.sife.jp/>のほか、参考文献の該当項目を参照。

37 みっくすさいだーのブログ、「SIFE JAPAN 関西プレ大会」、2010年6月19日、

<http://mixsider.exblog.jp/14068301/>

38 神戸芸術工科大学、「みっくすさいだーが SIFE JAPAN で準優勝!」、2010年7月6日、

<http://www.kobe-du.ac.jp/2010/07/14165/>

39 SIFE 日本事務局、「SIFE Japan 国内大会2010 初戦組み合わせと結果発表!」、2010年7月2日、

http://www.sife.jp/news_list/128.html

40 <http://sifeshiga.wordpress.com/>

41 SIFE 日本事務局、「SIFE Japan 国内大会 結果発表!」、2010年7月3日、

http://www.sife.jp/news_list/127.html

42 筆者はプレゼンテーション指導中心の「助っ人」的な Faculty Advisor であったが、「みっくすさいだー」ブランド立ち上げ時からプロジェクトを主導してきた Chief Faculty Advisor である終研究員は、今回 Faculty Advisor Award を受賞し、副賞としてロサンゼルスで開催される SIFE World Cup 2010（世界大会）を視察し、その経験を次年度以降の指導に生かすことを期待されている。

43 日本学生支援機構(JASSO)、「大学教育・学生支援推進事業【テーマB】学生支援推進プログラム」、

http://www.jasso.go.jp/sien_suishinpro/sien_suishinpro.html

44 詳細は以下を参照：学校法人谷岡学園広報誌『楽人』Vol.39、2010年1月、p.7、

http://www.tanigaku.ac.jp/advertisement/pdf/gakuji_n_39.pdf

45 芸術系大学としての本学は、「大学偏差値ランキング」的な意味での「上流・下流」の流れとは異なる位置づけにある大学であると理解される（前号論文4-1参照）。

46 学校法人谷岡学園、「建学の理念」、

<http://www.tanigaku.ac.jp/profile/idea.html>

47 本学設立構想の詳細については以下を参照：『神戸芸術工科大学開学二十周年記念誌』、2008年、p.20-23.

48 鈴木成文、『体験的デザイン教育論—神戸芸術工科大学環境デザイン学科の10年』、神戸芸術工科大学環境デザイン学科、1998年、p.10.

49 伴丈正志、坂口明弘、『環境デザイン学習の基礎指導に関する実験的研究』、神戸芸術工科大学環境デザイン学科、1990年、p.1.

50 カリキュラムポリシー・カリキュラム表・シラバス等の最新版については、本学公式 Web サイトの以下を参照。

<http://www.kobe-du.ac.jp/campuslife/class/schedule/>

51 大塚英志、『大学論—いかに教え、いかに学ぶか』、講談社（現代新書）、2010年、pp.123-124. 原文では下線部はすべて傍点。

52 田口壮、『脇役力（ワキヂカラ）—生き残るための環境づくり』、PHP研究所（PHP新書）、2010年、p.196. 著者はイチローのチームメイトとしてオリックスの日本一に貢献した後大リーグに移籍し、フィラデルフィア・フィリーズで「ベンチ入りを許される25人の選手枠のうち25番目の選手」を自認しつつ(p.78)、「最後のパズルのピース」として「つねにどういう形にでも変われなければならないし、あらゆる隙間に入り込めなければならない。そしてその最後のワンピースがそろわなければ、チームというパズルは決して成立しない」(p.86)変幻自在さ＝脇役力を発揮して、8年間の大リーグ生活で2度の世界一を経験した。